



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ソーシャル・キャピタル論の源流に関する一考察 : J. S. Coleman 「Norms as Social Capital」 邦訳によ せて
Author(s)	川辺, 亮
Citation	北海道大学大学院農学研究院邦文紀要, 37, 23-27
Issue Date	2020-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77368
Type	departmental bulletin paper
File Information	houbun37_p23-27.pdf



ソーシャル・キャピタル論の源流に関する一考察 —— J. S. Coleman 「Norms as Social Capital」 邦訳によせて ——

川 辺 亮

(北海道大学大学院農学院, 農都共生総合研究所)

A Study on the Source of Social Capital

— Foreword for Japanese translation of J. S. Coleman “Norms as Social Capital”—

Ryo KAWABE

(Graduate School of Agriculture, Hokkaido University, Institute of Sustainable Community)

I. 本稿の課題と構成

今日のがわ国において、ソーシャル・キャピタルという外来語は、社会学のみならず、様々な領域における分析ツールとして、また政策用語として、さらには実践的な場面における合意形成等を示唆するキーワードとして、すっかり定着した観がある。農政においても農村振興の分野においては、農村コミュニティの維持・再編というような形で、中核的な概念として重用されるようになってきた。農業経済関係の研究においても、楨平^[1]や藤井・藤田^[2]、川辺^[3]など、多数の研究論文等におけるキーワードとして用いられている。

しかし、この「ソーシャル・キャピタル (Social Capital)」(訳語としては社会関係資本)は、これら論文の中では、「パットナム^{[4][5]} 参照」などと紐付けされているのみであり、また、内閣府^{[6][7]}を援用して結合型、橋渡し型といった類型的な分析に拘泥する研究が多く見られる。これらの研究をいくらフォローしても、ソーシャル・キャピタルという概念について表面的にしき理解は及ばない。さらにいえば、これらの研究が参照した、あるいは参照せよ、としているパットナム^{[4][5]}にも、その答えは書いていない。そのことは、後述するように、パットナム自身が当該著作の中で明言している。

パットナムが参考にしたものこそ、J. S. コールマンの一連の業績であった。中でも今回邦訳

した「NORMS AS SOCIAL CAPITAL」(社会関係資本としての規範)は、ソーシャル・キャピタルの核心的要素である規範について論じた唯一の作品である。

そこで本稿では、ソーシャル・キャピタルの源流をたどりつつ、コールマンの同論文がその最上流部に位置する重要な研究成果であることを明らかにする。以下、Ⅱ節ではそのソーシャル・キャピタルの歴史的潮流を整理し、パットナムが論じたソーシャル・キャピタルの概念的根源と定義について紹介する。Ⅲ節ではコールマンがソーシャル・キャピタル論を論じるにあたり、「規範」という概念との関連性をどのように捉えているかを整理する。Ⅳ節では本訳「NORMS AS SOCIAL CAPITAL」にて論じられた、ソーシャル・キャピタルの重要な構成要素は社会規範そのものであることを明らかにする。

Ⅱ. ソーシャル・キャピタル (Social Capital) ／社会関係資本論の歴史的潮流

パットナム^[5]が「ソーシャル・キャピタルという用語それ自体は、二十世紀の間、少なくとも六回は独立して発明されており、そのときごとに、われわれの生活が社会的つながりによっていかに生産的になるかに注意を向けてきた」と述べているように、ソーシャル・キャピタルは20~21世紀にかけて、社会学・政治学・経済学・経営学などの様々な学問領域において論じ

られてきた。

稲葉^[9]、内閣府^[6]及びパットナム^[5]によれば、ソーシャル・キャピタルの起源は、ヘンリー・ジェームズ（小説家、アメリカ・イギリス）^[10]から始まったとある。その後、ジョン・デューイ（教育学・哲学、アメリカ）^[11]は、子供教育の可能範囲を開く鍵として表現し、L. J. ハニファン（教育学、アメリカ）^[12]は、人々の日常生活における人間間、家族間の社会的交流によってソーシャル・キャピタルの蓄積が生じ、それが社会的な力になるとした。そして、John. R. Seeley, Alexander. R. Sim, Elizabeth. W. Loosley（社会学、カナダ）（1956）^[13]は、振興郊外地区での住民におけるクラブ所属を特徴付けるために、ジェーン・ジェイコブス（都市計画家・ジャーナリスト、アメリカ）^[14]は、近代大都市の近隣関係を賞賛するために、ソーシャル・キャピタルを援用している。さらに、グレン・ラウリー（経済学、アメリカ）^[15]は、人種間の収入格差をソーシャル・キャピタルによって論じ、ピエール・ブルデュー（社会学、フランス）^[16]は、ソーシャル・キャピタルが教育機会や雇用機会を規定し社会階層を分化、固定化するとし、エックハルト・シュリヒト（経済学、ドイツ）^[17]は、社会的ネットワークの資源としてソーシャル・キャピタルを論じている。そしてさらに、ジェームズ・S. コールマン（社会学、アメリカ）^{[18][19]}によって、協調的行動を起こすメカニズムとして論じられた。

しかし、このソーシャル・キャピタルを一躍、全世界に普及させたのはR. D. パットナムである。パットナム^{[4][5]}は「ソーシャル・キャピタルの構築は容易ではないが、民主主義がうまくいくための鍵となる重要な要素である」、「ソーシャル・キャピタルは、人々の生活の多くの側面に対して、強い、そしてはっきりと測定可能な影響力を及ぼす」と唱え、注目を集めた。以来、OECD^[20]などの国際機関や、日本においてはJICA^[21]や内閣府^{[6][7]}、農水省^[22]、厚労省^[23]、北海道庁^[24]などによって研究されることとなる。

パットナム^{[4][5]}は、南北イタリアの政治パフォーマンスの比較研究やアメリカ社会のコ

ミュニティ崩壊についてソーシャル・キャピタルの観点から分析した政治学者である。パットナムは、ソーシャル・キャピタルの概念定義を「社会の効率性を改善できる、信頼、規範、ネットワークといった社会組織の特徴」、「ソーシャル・キャピタルが指し示しているのは個人間のつながり、社会的ネットワーク、そこから生じる互酬性と信頼性の規範」とし、「自発的な協力がとられやすいのは、互酬性の規範や市民的積極参加といった形態でのソーシャル・キャピタルを、相当に蓄積してきた共同体」と特徴付けている。しかし、その概念定義の主要な箇所において「社会（関係）資本についてはコールマン（1990）pp.300～321（Chapter-12. Social Capital）を見よ」としており、パットナムのソーシャル・キャピタルの概念定義はコールマンに依拠して行っているのである。

III. コールマンのソーシャル・キャピタル論と「規範」

コールマンは1988年に「Social Capital in the Creation of Human Capital」^[18]を著し、「人間の行為は社会的文脈によって陶冶され、方向づけ直され、制約されるものであり、規範、個人間の信頼、社会的ネットワーク、社会組織というものは社会だけでなく経済が機能するためにも重要である」、「効果的な規範はソーシャル・キャピタルの有力な一形態である」とし、ソーシャル・キャピタルの定義づけを行なっている。さらに「規範と効果的な制裁」という節において、「規範というソーシャル・キャピタルが、人々を公共の利益のために働かせる」と、ソーシャル・キャピタルとの関連性を論じている。

そして、その2年後に上梓されたのが、パットナムが引用した『Foundations of Social Theory』^[19]である。同著の「第10章 効果的な規範に対する需要」において、「規範という概念は、社会がいかに機能しているかを描写するのに重要」と述べている。このように、同章では「規範」の重要性について論じ、主には規範の需要や発生条件、及び賞罰との関連性について展開している。そして「12章 ソーシャル・キャピタル」では「支配関係、信頼関係、規範

はソーシャル・キャピタルの諸形態である」,「とくに重要な形態のソーシャル・キャピタルとなっている指令的規範」,「実効性のある規範は、有力な形態のソーシャル・キャピタルとなりうる」とし、ソーシャル・キャピタルと密接な関係のある概念として「規範」を取り上げている。しかし、規範そのものの定義や要件を掘り下げているわけではない。

コールマンが「規範」について精緻な考察を行なった作品こそ、本訳「NORMS AS SOCIAL CAPITAL」^[8]である。なお、同論文は「Social Capital in the Creation of Human Capital」^[18]では参考文献としてリストアップされている。また、『Foundations of Social Theory』^[19]の第10章から12章にかけて事例部分を中心に部分的に利用されているものの、引用はされていない。そのため、本論文はあまり注目されず、邦訳もされていなかったものと思われる。

IV. 「NORMS AS SOCIAL CAPITAL」によって明らかになったこと

「NORMS AS SOCIAL CAPITAL」^[8]は「合理的選択の観点から規範を考察すること」を目的とし、「規範の出現、形成、および性格、ならびにそれに伴う賞罰」についての考察を行っている。

本論文はイントロを含む12節によって構成され、「規範」についてを中心的論点とし、その性格・課題・特徴・状況・事例・権利・法律との違いなどについて詳しく論じられている。この中で「規範」は151回の記載があり、規範について多角的かつ丁寧な論理分析が行われている。これに対して「ソーシャル・キャピタル」は最終節においてただ一度使われるのみである。このことから、ソーシャル・キャピタルを理解する上で、規範が極めて重要な概念であることが示唆されるのである。

本論文の中で、規範について「行為—自分自身の、他者の、またはその両方—に対する期待であり、どの行為が正しいか、または間違っているかを言い表すもの」であり、「確信的行為を規定する」ものであると定義づけている。その規範の出現については、「行為が外的影響を持

つ場合に規範が生じる」とし、規範は「正の外部性から生じる」とある。つまり、規範とは、その行為が間違っていないかどうかという、判断や予測の拠り所を定めるための指針、ということであり、その出現は、正の外部性すなわちグループの連帯や差別化などの効率的な手段である、ということである。

そして、「外部性に影響された行為者が行為の部分的制御の適切な水準を獲得できるような社会規範が生じる場合、結果として、行為の水準と方向性がその全ての成り行きを左右するという意味で、社会的に効率的な成果をもたらす」、「そうした意味で、社会規範はソーシャル・キャピタルを構成している」と結論づけている。このように、ソーシャル・キャピタルの構成要素は社会規範であると明言しており、ソーシャル・キャピタルを論ずるうえで、社会規範こそ極めて重要な概念といえるのである。

V. 結びにかえて

本稿はソーシャル・キャピタル（社会関係資本）の概念を探求する中でたどり着いたコールマン「NORMS AS SOCIAL CAPITAL」を訳出するにあたり、同論文の内容とその意義を整理したものである。

ソーシャル・キャピタル論の源流はパットナムにあらず、コールマンにあり。とりわけ、「NORMS AS SOCIAL CAPITAL」を読まずしてソーシャル・キャピタルを論ずること能わず、である。

浅学ながら、コールマンの本論文がソーシャル・キャピタルを論ずる上で必読の作品であることを確認し、本稿の結びとしたい。

付 記

邦訳にあたり、出版元であるParagon House (New York, USA)のエグゼクティブであるアンダーソン氏(Dr. Gordon L. Anderson)は、突然のメールにも拘らず快く承諾してくださった。また、本学大学院農学院学友の末永千絵氏には、大学図書館から本書を入手してコピーを送っていただいた。記して厚く謝意を表したい。

引用・参考文献

- [1] 榎平龍宏「地域農業・農村の6次産業化とその新展開」『農山村再生の実践』農文協, 2011年.
- [2] 藤井至・藤田武弘「域学連携型農村ワーキングホリデーによる地域コミュニティの変容: ソーシャル・キャピタルの視点から」『農業市場研究』, 2015年.
- [3] 川辺亮「都市農業地域の6次産業化におけるソーシャル・キャピタルの重要性」『北大農学研究院紀要』, 2018年.
- [4] R. D. パットナム『MAKING DEMOCRACY WORK』, 1993年. 河田潤一訳「哲学する民主主義」『哲学する民主主義』NTT出版, 2001年. pp231.
- [5] R. D. パットナム『BOWLING ALONE ~The Collapse and Revival of American Community~』, 2000年: 柴内康文訳『孤独なボウリング~米国コミュニティの崩壊と再生~』柏書房, 2006年. pp14. pp27.
- [6] 内閣府国民生活局『ソーシャル・キャピタル—豊かな人間関係と市民活動の好循環を目指して—』, 2002年.
- [7] 内閣府・経済社会総合研究所『コミュニティ機能再生とソーシャル・キャピタルに関する研究』, 2005年.
- [8] J. S. コールマン「NORMS AS SOCIAL CAPITAL」pp133-155.『Economic Imperialism』edited by Gerard Radnitzky and Peter Bernholz. New York: Paragon House, 1987年.
- * 上記引用部分については, pp1. pp2. pp4. pp8. pp10.
- [9] 稲葉陽二『ソーシャル・キャピタル入門』中公新書, 2011年.
- [10] ヘンリー・ジェームズ『The Golden Bowl』New York: Charles Scribner's Sons, 1904年. 青木次生訳『金色の盃』講談社文芸文庫, 2001年.
- [11] ジョン・デューイ『The School and Society』, Southern Illinois Univ Pr, 1915年改訂版. 市村尚久訳『学校と社会・子どもとカリキュラム』講談社学術文庫, 1998年.
- [12] L. J. ハニファン『The Rural School Community Center』Annals of the American Academy of Political and Social Science67, 1916年.
- [13] John. R. Seeley, Alexander. R. Sim, Elizabeth. W. Loosley『Crestwood Heights: A Study of the Culture of Suburban Life』New York: Basic Books, 1956年.
- [14] ジェーン・ジェイコブス『The Death and Life of Great American Cities』New York: Random House, 1961年. 黒川紀章訳『アメリカ大都市の死と生』SD選書, 1977年.
- [15] グレン・ラウリー『A Dynamic Theory of Racial Income Differences』in Women Minorities, and Employment Discrimination, ed. P. A. Wallace and A. Lemund, Lexington, Mass.: Lexington Books, 1977年.
- [16] ピエール・ブルデュー『Forms of Capital』in Handbook and Theory and Research for the Sociology of Education, ed. John G. Richardson. New York: Greenwood Press, 1983年.
- [17] エックハルト・シュリヒト『Cognitive Dissonance in Economics』in Normengeleitetes Verhalten in den Sozialwissenschaften, Berlin: Dunker and Humblot, 1984年.
- [18] J. S. コールマン「Social Capital in the Creation of Human Capital」American Journal of Sociology, 1988年. 金光淳訳『人的資本の形成における社会関係資本』勁草書房, 2006年. pp207. pp218.
- [19] J. S. コールマン『Foundations of Social Theory』Cambridge, Mass: Harvard University Press, 1990年. 久慈利武訳『社会理論の基礎』, 2004年. pp372-373. pp472. pp486. pp487.
- [20] OECD『国の福利: 人的資本及び社会的資本の役割』日本経済協議会, 2002年.
- [21] JICA 研究所『ソーシャルキャピタルと国際協力』, 2002年.

- [22] 農林水産省農村振興局・農村のソーシャル・キャピタル研究会『農村のソーシャルキャピタル～豊かな人間関係の維持・再生に向けて』, 2007 年.
- [23] 厚生労働省・地域保健対策におけるソーシャルキャピタルの活用のあり方に関する研究班『住民組織活動を通じたソーシャルキャピタル醸成・活用にかかる手引き』, 2015 年.
- [24] 北海道知事政策部平成 17 年度アカデミー政策研究チーム「ソーシャルキャピタルの醸成と地域力の向上—信頼の絆で支える北海道—」, 2005 年.

Summary

In Japan today, the borrowed expression, “social capital”, has become an established analytical tool not only in sociology but in other fields as well. It serves as a policy term as well as a keyword that suggests consensus building in practical situations. For those working on agricultural revitalization, it has come to be used as a core concept for the preservation and reorganization of rural communities.

The purpose of this paper is to follow the origins of the concept of and show that Coleman’s research must be considered as being among the most important contributions to our understanding of social capital. Section 1 presents the issues. Section 2 summarizes the historical trends in social capital and introduces the conceptual roots and definitions of social capital as discussed by Putnam. Section 3 summarizes how Coleman perceives the relevance of the concept of “norm” when discussing social capital theory. Section IV summarizes the

main points of this translation of “NORMS AS SOCIAL CAPITAL”. It became abundantly clear that social norms are an important component of social capital.

The aim of this paper, “NORMS AS SOCIAL CAPITAL” is to “consider the norm from the perspective of rational choice”. It discusses the emergence, formation and character of the norm as well as the sanctioning of social justice behavior that accompanies this. We performed a logical analysis in a targeted and careful manner and found that the essential component of “social capital” was “social norms”. It also became clear that social norms are a crucial concept that must be taken into consideration in any discussion of social capital.

The origins of social capital theory lie in the work of Coleman. Especially, This paper, “NORMS AS SOCIAL CAPITAL”, is a must-read for anyone doing research on social capital.